忠臣義士備藩乱論 全

貴重書
1004

忠臣滅偏癡氣論初稿

式亭三馬戯編

江戸書賈
雙鶴堂梓

秘蔵書

題巻首

偏癡氣先生ハ何人ぞ。生得田舎ゟ正銭差出。
仍称石部金吉といふ。性偏屈ゟ木ハ木。金ハ金。
理ハ理非ハ非と壓を故ゟ當世の人氣ゟ過を用交
社交情をとゝぶ。宿昔青雲ゟ桟を跌し。黄銀代
〻の飯粒ゟ離ゝ見以降。癡を惜〻清分と樂
ミ。弱を笑ゝ悪態と衝き。浮世を三文ゟ安

裸体を面貫ふ高ぶる。頃日忠臣滅亡雑劇を
觀て大ふ嘆じて曰吁瞽目萬人明目一人なるべし。
大胆至めゞ来異痴漢。仕てものゞ言ふず。且莞爾と
笑て曰。鳥呼忠臣醫阪角。泥中乃蓮沙中の金。
唐山は豫讓。國朝の伴内先醒。和藻両朝に
唯二個なるべし。凡て性質の善悪を心し。行蹟の
理非を明め。而后チヤンヤと誉め。ヘゲタレも悪学
べきを世人評品の擇とたゞ。やゝ〳〵みりちやの
茶〳〵むちやゝ。蚯蚓をも大蛇とも。大象とも土龍と
いふべし。余傍ふ在て曰。先生太ゞ村學究なり。當時
さやゝな俗といへば。淨瑠璃も語ゝ演劇も仕
うゝふゝ。詰ゝめ論ふ息精張ゝ。肚を耗ゝけゞ損
あ拙ばゝんといふゞ。ちゝ高て鼻唄。文ゝふ上
もゝで偏痴氣先生耳ふ。ゝもゝけゞ拘攔ハ嫌。淨

瑠璃否。のけ搆もなき愚老が身かなしび思ふのいはで
止かんも腹脹まく寐ねめまく。眼鏡もうけぞ糸ぬつ
く。書記〜〜〜〜偏癡氣論。定めて高論と思はれ。陰鍵
論の銅脉ふく。論〜〜証據ぬき偏癡氣なりとも云爾

文化八年辛未夏六月中浣本町延壽丹
藥店ふいく

式亭三馬戯題

加古川本蔵が武の用意する図

○ゆらの助が人ぐゝへ酒を梅幸さどのさろせうるものぐるなしこのつるのあ屋武ちゑてきくとろろと大ちがいすろ

ゆらの助せわろへて天川やへゆく所

力弥堂にて五ア人の石塔をつくる図

えんや若狭の助けんろうをなす

伴内がこゝろのこと

○伴内は大兵にてまことに
りゝしき男らしき
武士なり

伴内らくはこれなどの
ことをめれがあるにてゆくも
ゝ行き
ゝたらゝあれものらうたち
九たゝらのれ
あぐりもとそむくでもさいから
石はやそうこのまゝ

勘平とかるとふざれの不とうくりかちする

とみせの浪ふ抽へゆくこと

了作なげられて宿をとること

九やま宮九ろをかんごうする不

かゝよゆゝゆらの助人もろ〳〵ちよをちくゝ不

平太ゝ ひさゝくゝ ゆゝてゆつくる不

忠臣藏偏癡氣論

偏癡氣先生著

式亭三馬再校

○足利左兵衛督直義公

今度鶴ヶ岡八幡宮造營成就ふ付。兄尊氏の代系としておもき身分ふ有りながら。塩冶が妻かれよふ向へて。兜の本阿弥。目利くとゝ者をとるこゝ須人俳ふ似合ゞど。又後醍醐帝よりあつく義貞の兜ゞをゝ拵べゞて。其いゆゝ兵庫司の女官

うしかうよとて改さとくかぐりする紀癡呆なり。
兜の数八四十七あるゆへ也平筋兜かぶとく多きその
中ゆも五枚兜の竜頭とあるべ。よろおど紙き物を
骨董舗ゆ入すても。大将の兜とゆ云ふ物なり。
弟ゆへ菓奢待の名香かをるゆ。かぐるゆも小鼻
をいくくして。天仙琴を焚きて猫の鼻ゆふんく
いくて嗅中うれべ。ゆんやとうくべきを柄ゆもあるぞ。
名香薫る竜頭の兜。蠶子ゆもまとゆるべき紙。

直義の不鑒定馬鹿律義とやらん笑ふ絶うり

○高武蔵守師直

師直ハ鎌倉の執事職足利直義社参ゆ就てハ
殿一の大役弟更勅使弛走の大小名を指揮して
例式作法を教授を。博達聰明の士ゆあらざんバ
叶役義勤ゆがたく。ちくるゆ塩冶判官等。けさび
弛走の役義を蒙り。万支師直ぶひきすべ進ゆあづ
かゆ。時宜の指圖をうけ。弟ゆへ礼法古実の師範

なれば。偏へにあてもなく。阿るのみあるべし。身分相
應の御義。猶物のあるべき筈なるゆへ。これまで俗の
會釈ゆへ。はよいなど。剃髪館において女房ありの
文箱をもづらる達。師直に恥辱をあたへんとす
仕方。言語道断不出来の至なり。きらねば茶を飲
でうへ。お願の御礼をまうへ。世上の習俗。すてい人や
判官等。師直まうり見べ坐頭の杖を失ひ。舟師の
篙を流〳〵るごとく。役義の勤〳〵ぬへ目おかたう

等が吝嗇うち記ることもいはいはなり。師直の立腹
甚敷なるべし。若狭之助は本藏が弟にはあらねど。師直が
勢成も能く役筋首尾よく法にあり。弟一は君への忠
義。身の面目をとるさまなるぬを柄とらへべし。世人
只師直を誅きと役筋一途にはあらずとも殺さ。
只判官が妻かゝよゝ憑慕の支師直が不調法也
侯文哥などの往来でうゆへ。聴と密通するゆ
もあらざるべ。さまで咎るべきのことゆもあれし。或人

の曰師直の侍が判官を切かけるを見て抜合せしを
甘ぞと逃隠るを比類の至りとのべき。欲予が曰不然
これは直義社稷の本陳孫を勅使饗応の時そ
なれば場所を憚て抜合せざる也。かゝる急場を至
て君臣の義を全んと進退礼をなるの士とゝ
べしさるを判官は切腹付られしを師直
はいさゝの怨もなし是あわて考るべき也
又曰義狭之助は出合て両刀を抜出し外と逃て

彼こゝろしは軽薄表裏の士なるゆえ予が曰左ふあら
ざ本義が音物を受てよろこ忽卒ふの日の正言が
きの毒ふなりしいこゝろ廉直なるがゆえ也 譬べ
吉公と亀ゝと小児淨瑠璃をする時。亀公ふ対て
吉云悪態をして義絶ゆと真の時亀公のとさん
飴棒をとりて吉公ふ呈さるれば忽寛ふとゝろ
て和睦以前ふ倍さるが如し師直初時の失言
ふ不出来とゝども強て改るふ憚ることなるとと

あれべさのこゝろむべきふあるべと

○鹽冶判官高貞

大切の役義を蒙りながら。師直若狭之助よりも
をくるふ遅く登城をるへ分のるぞや。はふ力弥と
使者として桃井が館へ参へし刻限正七ツ時と
十合せながら。遅滞せしへ役目ぬろそろやいろん
甚不出来なり。窠間あへ自鳴鐘もあるべくれべ
八ツ時より起出て支度して待べきふ左いうくて

べんくと遅りしへ。師直ぐ云ふ遅へぞ。かゝるよぶ新
ぢりながらて。内ふだりへぞりけりてござるゆゑん。
加之差別もあるべきふ。文弟をとり出。是へ奥
かゝるよ方より系しなどゝの大たるけ。見苦かく
自慢より引出しる失なり。竟あへ短兵の一刀
をぬいて真額へ切つゝる。是ぞまるぐ剱法ふ暗。
急場ふて人心せくゆゑん。切かゝる双へ必ぞ敗て
滅亡となり。對手を仕留ざるの也。判官ぬ

師直ハ葛かゝゑ。只一刀ハ指貫さゝべ。卒爾ハ為ハらざる
尚ゝも一端取逃とも。師直ゞ命ハ至極助るべゝ
ゞ。是ハ皆若衆未熟の誤なり。扨又上使接待
ハ極まる法式あり。判官其礼を尽ゞ。上使
書院へ通ゝ。坐ハ着ゝゝ着うねうちハ。お盃の
用意ゝとのゞ法ゝゝゝねるゝゝ。尤祝儀ゝとゝ
りよゝうゝ為ハへ。上使へ餐煎ゝるゝ是又礼式
なり。此義迚も上使のおゆて盃ゝゞ付るゝ

不礼なり。兼て勝ゝハ羽ハあるべきゝゝ。孫又
今日の上使ハ切腹の検使と。かゝて覚悟ゝ
べ者さゝのとゝ。其ゝ上使のおゆて肴を解。
衣彼を脱ゝゝと失礼ゝ。切腹の朝ハ
臨ゝ。由良之助ハゞさゝくゝと交くゝのまゝひ
と未練千万ゝ。ゝ為ゝ乳母をたゞゝる
小児の心ハ等ゝゝ武士の恥べき不なり。
此餘ハ師直ゞ條下ハ記ゝゝべ再びこれを

倫ぢごと。寔ハ酒狂ろ血迷てゝるハ赦へある
すゞ

○桃井若狭之助安近
館ゆて師直ハ恥しらゝと残念一心ハ凝て
已ハ討果さんとぐきハ不存をきゝ家老加古
川本蔵ハ狂ろざる折言を立さ也。意趣
とあるゝ。且又本蔵ハ厚さゝしゝハ是ハ
もせよ非あもせよ。思ひ込ゞ一念を仕通さゞ

武士の意氣路。そゝぐ足落離とあ遠しゝて
かゝとり疵ぶハ負せぶ。扨ゝゞ合せ〜刀のま
お酢目と失ひ。面巻人ゆり本蔵ハ何と云
沢さべきや。家来しゝらひながら武士ハ折言
すで立さ也て拵ゝ〜拵ぶ什ゝハ飄々と女童
の遊び戯又るゆりハ言ゝの毒千万。扨又本蔵ハ
むゝての物語。奥とゝゝ三度中でゝゝハ
チト鼻毛ゝ〜し。其一ハ。日比基を短気ゝと

奥を初めそなたが異見。其二つゆへ。無念かさ
なる武士の性根。家の弘絶奥ぶ
いなれども。こへ分の哀ぞや。家の弘絶奥ぶ
歎だうをとひやりて。なを初め大紀伊の
折助ふ至るまで一家中の歎を想像ざるへ
情なき主人なり。又刀の役目弓矢神への
恐きとりど。遺趣斬ふ命をたてと弓矢
弥ハりふまど。又戦場あて歩死せどとも師

直一人討てさろまべ天下のあなどりがとう
りども。太平記をよそよ。忠義さへも兄弟氏ふ
双向ふて合戦ゆむ時ふ死世なれべ。師忠一人
討ふうとも天下のあるとりふあどのるゆもあう
ど。其三つふ。奥ふもあふてよそなぐらのいるる
どひしとへどうゆうふ未練ぶ狂うさうふ思わるこ。
志し若狭を助年若のことなれべあげて論
ぜるふたるうど。

○大星由良之助義金
其主判官没して後。忠士を集め。且夕仇を
報ひんとの議あり。山科に蟄居して竊に
鋭氣を養ひ。時節を伺ひ終に敵師直を
討取事。如何ぞも唐土の豫讓ぞも恥べき
ぞと。然れども治世の良臣とも云べきぞと。かゝ
どゝ云義を尽すとのみ云べし。かゝる敵討
などゝいふやうな禍の出来ねやうに為て斗へ

へき筈なり。身に家老の職分。一國一城の權柄を
握る由良之助。かゝどの大事出来さるべき
安閑として國に居るべき筋の夏ぞや。是そこそ人
判友頼義故のゝ振るものへらぢに。さほど頼義
なる性質をよくあらば居べし。ものゝ中にも
平遠猛勇人孫繩孫繩を以て中さぬ。
まんの結中に紙表の陰ざる例古今少
など。頼義とゝいふも如何痛疾みして平山人定の

かりうけれども。身ふちにて大病なり。大病なれば役義辞退するふ。性ろう是を不埒といひんや。是其二つ。力弥ゞ一力へ書系下〻かりよの密書。人多き揚屋の座敷にて披見し。たちまちかるる九大夫ふ人ふ又付〻ろ色。出念のあまりかるると身を〻一殺さんとを弁る不仁のあるまひ。是はまこと自分の思慮うまく。大事をとへ立なぐろう酒色ふ耽るゆゑ。是其三。夏の九大

まふ大事と明をとへ。是へ鴨川で水練を食〻て仕舞ふ。けりゆゑ。他人溺るるあるまゞろ色ども。出へ来き揚屋の内。餘人の足弊をも悔〻さうへ不念の至なり是其四。蛸を喰ふこと其時へ四十四の骨〻ゞ砕るまうふ有ることとを。是て人の逮夜ふ拵さ〻精進を落ることとなるなりゝべ。さわど逮夜を大切ふろうで茶茶を拵ふ。蛸を食へようも不慎の

知こと。是真五。五行の時ハ雨戸をたてさせ
これ助ぶ工夫。竹をたてそりて絃を張。暗居撓で
溝をうつと。障子のうつぶたてさせうこと助
ぶ他住居の暗居暗居ハ竹の力あてもたへむ
べくもとども。師直ハ大名なれば。屋敷も堅固ふ
建まへも丈夫なるべし。中く竹の力を借て
雨戸をたてうつ。ぶたてさせうこと。助
天河屋義平ハ謂て曰。亡君御存生の時

うつべ一方の旗大将。一國の政道をれあづけ
ヤさして猶うつねれ器量と。左程ふかうつ判
友な命の義吹挙して。一國の政道ハ頼ぶと
とも。彼ゆ名武士ハ取立ぶ取立ぶざるや。賢を知て
挙ざるハ不忠の至ぶこと。今始て義平ぶ賢を
る成探知るふあうぶ。其ハ證據ハ泥中の蓮
沙の中の金とハ貴公の事。左もあうんさも
さうぶと。見込んで頼んぶ一大事。けぶ助

いまだ人にいさうに疑いやさねとらり。是従来
義平が心後を能知てゐる由なり。知らざんべ
なのぞ。此度の一大事をふくくと打むべきや。
云うべ刑主人後生うべ一方の総大将。
一國の政道を行るのとへ。誠ふ九きまが而得
なるまでの正月得ふして。一時義平ふ扶も
行るの虚説なり。是婦女の心ふして武士の
取ざるふなり。是其七。世良助ハ判官の家老。

義平ハ判官ハ出への町人。格式をうべ論ず
時へ。ふと炭屋わどちらがふ分ふ。まふ何のぞや
世良助長持より出るがらるや。義平ふ
向ふ家をたうハ。扱く驚るへるれ広屋など
甚お遠の礼義ハ。浪人しるゆふ分を早
下るとらハ偶ふして世とさう亡君の仇を
報ずんと。旦夕心をつくを世良助。浪人
しても家老なり。出への町人對して方端

河内丁寧なるゆへ。是を人より受るゆへ
のみもき職分を酒〳〵なるゆへ似うり。是其八。
捕人をもつて義平を囲ひ。公庭を穢る事。
是も下のできるゆへ。あ〳〵私とも。今夜獵
食人出立する期ゆ偏んで。公庭を穢さとて
仇の義うあらん。たゞ疑〳〵ものゝ。家初
仇のものも教すねおゆ穢るがよし。今義平ゆ
異心あらべ仇とするものゝ。お後不都合の

仕方。是其九。敵師亜を付えて牌前ゆて焼香
の義。第一ぢんゆ十右衛門ゆ左の斗ひなもども。
第二番ゆ勘平ゆ焼香さるゆ道理なし。勘
平ゆ主人へ對〳〵不忠甚〳〵大だわけ。別へ
舅ゆて他をゆかけ。敵討の場面へも出ずと
大死〳〵る者なれべ。先第一義士の連判ゆ加
べき人柄ゆあらずと。ゆ赤心の忠士数人を
選び紙。二番ゆ焼香さるべきいわもは。是其

十也。俗にてくく詰ふ法さど。ちぐ〳〵こてふ
碁をと。ある人の曰。七段目ぢうふが刀をちうと
持そへ。夫勢平連判ゆへらつまりうど敵一
人もうちとるぞ。未来で主君ふ言沢ある
ずど。其言沢にてやうゆと。ぐりと密迫む
碁の透る。下ゆそ九きま肩先ぬりを七枡
八倒けふるずひいふも不思義也。唐紙一枚の
下へ蚤が一疋発めんでさへ。ずんざうまとちり

つく。上ちうにうぬりのを。ゆうにゆいうるる
術を究るや。掘の下ふ居る九きまを碁の
透間ゆりさうにそれ。見突の鰈ら。富の
札をつくりも。俗祇を生業なる紙。え
るゆり法けしいきうにのこ。万一九きまが
居ぬ付ハ。かうるぐを持そへて。そこ沢
いうりや変あとひなぐう産業中を探り
出り。碁も根板も祇だうけふして。勘平

ふりかへさるべしとなり。けだし深き也。其云伏ハこりや。家

○斧九大夫

九をまへ能物を未萌ふせぐと。先見明ありしなり。

人とりのべき狡々たるつが曰。我ハ用くわをれべ

御門もいまだ用門もれ赦さるべき吉事の

ハ親向とりて。九をまへ云ふるべ。けだし敵の

越度。捕りて流罪。重りて切腹とりて。果

て判官切腹なり。叔父我子定九郎が平生の

行義を見て。行末を案して幼稚なり。果

て定九郎盗賊辻切をなし。終に人手かかる。

是先見見えすく狐ふせぐなるべ。ものそ

ひとりのみを勧善せんや。兵猜らん。國家

の蓄害を未萌ふせぐる。

○加古川本藏行國

若狭を助ず若氣の短慮を孫ぐと。却て悪

行を励し勧め。裏より出て師直へ賄賂の進物。け計極て拙し。是あ代表裏の侍と
りつなりし。彼きどもは言ゆふ比されば
本義を優とて。拙き計とらんども。全人ふ
意なく役義を勤させらるへ。はふ元ての
功と云べし。虚無僧ふ爲て京へ上る。聟
力弥が多ふをりて娘の源氏を捨る事。
るふ迷ふ親心といへども。まちつと仕給も

ありさうなるもの。未安しふ九段目を考へ
べし。

○戸無瀬

とは其ふ徒ぶ姫なるとぶ紙ちどぶ。うさぐ
らふふ見車る。仲居のより上るまう。女帝
の累る。捨りて彼の嫁ふてへあるまじ。判
定なりか紙使者の義。小浪ふ元沢させん
として。いろりて穢をあてし。アイタ。あつと氣者

の奥さまの家を尋ねてぞ参へもうこれ物の
るぞや。云つきやうそ花車風の稚ぶて。武士
の女房かくへたるへど。いつで判友より
美狸そゆ方へ大切の使者。来の女房
の高沢さへいうでしきふ。小女ふ高沢ごとる
たるわざ渋ぞ。汁一使者へ対しての失礼。二ツ
ゆの美狸そゆが為の風俗。自随落ふ
ゆえて外聞あし。ふ〳〵使者ハ云号の

聟ゆもせよ。今日ハ表向の使者なれば。たゝ
たゝねば。美狸そゆ小身ようとも。玄関
番。高沢役人なるべき筈。こふ美狸そ
ゆ。雪のごとくとして一間をかけ出。かふふ対面
するも。町人めきて俗り粧ぐし。まへさて紋。
戸紙ハ小波を連て山科へ行ての大不出来
さるるなるの一くさ十きて不届なる
夏。一くかぞるふ遑あるぞ。こへ〳〵九作

同の仕うちをえめよべし。

○小波

[illegible]

○かるよ御前

初段義貞の兜を嗅あてるる。さのゝシャシャとりふるどの夏ゆもあらうぶど。扨忠臣藏の發動かるよのあさるゆ系發きり。たとへ師匠の系慕ありとも。小夜衣の古哥あて

和しむるるへ。ゆるゆふたらうへべきをたへなくて。夫判友大切なる役目の當日。ぶざく草文給ふへて疲中ふ拍子。出所第一弟ゆへ万事師範る師匠。あてこきりの哥をえせ作けしへ。役をとのうねだうりの仕方。扨く了簡なき女子。夫判友を大切ふ思ひ。密夫をるこそるる色。師匠をあやはしおきて。けゑの役目万端湯流るうへ。あんべいを

さるごとの。これ貞女の道を知て。行を慎らざるなり。

○早野勘平重氏

勘平の人を殺して金子を奪ひ。大盗の後日ふことを恐の敵とらへられども。殺すべきの真の間。旅人を殺し金子盗ひ去遺なり。是大賊の徒なり。そもいさて無。富不人うをあるは。男ち一ち人ふ殺されさて。

戸板ふのせて担ぎるふ。らふふ我殺しこ強文ふ合べて。分の名死骸をあらため見ざるや。扱て殺しふ去遺きべ。さりてハ死骸ふ去ふ。一ち盗り殺ものをうを述て。其后ふ切腹せざるや。よ男ハ横死ふも せよ。病死ふも せよ。そもなりふして見向も せぬいうぐのムぞや我家の倒夫でも死んざと歩べ。人ふたくうれて死ざろ。番木鼈でも食ふろ。切ら

きても死ごろ。病でも付さること。一命いかんとでけて
うち。疵捨さるゞ人情なり。いかんぞ男の死骸
をあらくあつかんざるや是則鉄炮疵ゆあらざれ
ば切腹ゆもちよだねこるなり。不念の至とゆふ
べし。かゆうな麁相者。外のぞ敵討の仲ケ間ゆ
入べきさ。さる初さる人判官大切の役目紙紮。一世
一度の晴の登城。さる供先ゆて女ゆ戯れ足利
直義八幡宮社系の陣所を穢し。あまつさへ

さる人判官ゞ大切の場ゆも有合さゞ。狼狽
ゆて切腹せんとさるゝしへ。あるゆ者よと
いらねだうのさせうけこ。案のごくえより
腹へ切らね事なれば。女の吉弥ゆ代ゆやと
なり。さる場より女の犯罪へ逃込しへ例なる
腰抜なり。但し一門一家もなき身なる故。
又ハ親類ゆ影向もなきねとゆゆ公ゆや。さう
さても仕方のあるべきこ。扨猟人となり

夜山ゐ出。古傍輩の千崎弥五郎ゐ出合。
面目なさの泪のなるゐ。用金紙泪人まを
力ゐ出候なるゞ云がゝるゐ成て出来もせぬ
金の出覚ゐ男まで紙他まゐるけ。不忠不
孝限なるなさ奴なり。なるのゝなるゞ衣服
とるゐ。世ゐあるし時主人より拝領し
る定紋付の時被とゝ。なゞゝゐ社ゝ。
平服ゝて山野を蒐り。大切なる主人の

定紋を猪猿の血汐ゐて穢し。臭く穢しゝ
匂ゐゐ觸るる。不敬譬んなるなし。六月廿
九日の夜猪を歩止て山鯨店へ売用
なるさ汐なれば。肉ハ癒を拭ゐて皮ぞり
の直歩なるべし。変らゞ素人なるさゐる。
但し毒の毛ハ夏毛とゐて秋変さる。
ゆゑ。猪も変毛ハ能拭ゐや。我ゐ筆金ゐ
あゝざれべそなるハ。且火縄を振て

猫ハ逃づる。火縄を消しとらるる猟人ハ
似合ざるる。其うへ鉄炮ゆて二ツ三ツ擲き
るる毒。猫うへ人ハ間ゆもちゝるべきを。縄
捌して見くとゝゝ。初て猫人と云ハうへき
つゝ狼狽ゆうせ。コリヤ猫人茶ハちゝさゝ懐中
とさゞと大癡呆。二ツ玉ゆて歩止るものゞ
茶ハさて毒。百什つゝとも獲魁るゆ
あるべきや。鉄手かゝゆでゝうゝゆるものゝ。ハ

ハあるる金財布。天のゝ与へとゆ戴きしハ
いゝゞ。世のたゝうへも天道人教さゞとゝ。
ゞゝるとゝのぞ。人を殺し金ゆ元とゝハ天道
どこの出ハ知あるべき。扨彼財布を懐中し。
猪より先へ逸散ハ蒐出やしハ一日三十里の
早道の達人なるゝ。実ハ猫ゆ別し
ゝゝ歩も仮拵更ゝゝ。且猫ゆ命もいそぐ
歩道のゝなきべ。遥ハ物のびゝるべきゆ。

其夜のうちに遁れて。彼が十あまり人をふ
殺し。夜明て宿をいでんとせしに。かくるゝ者壹人
のみなりけり。其時一文字屋の亭主ゞ曰。
ちれゞ去て居るゞ早おの。縞の裁で拵ること
金ばの布。と浅葱と変より。我情中の縞の
紙布とこそ。てのゆ天ゞ世一盗ゞも立
ね虚貝布と。情ゞ拵て居るゞ馬廉律義
より。其友毋親ゞ足ゞ分らず。紙布を引出し
てゞ掛。一く条相ゞ万なる男。家初孫会
の強勢ゞ狼狽。又紙ゞ夜ゞ六月廿九日より。
今日七月朔日まで。うこと。揚句の果ゞ
犬死。るやゞ者。血判させて義士の仲
間入。加ゞ。々右衛門ゞ泳ゞ命ゞ惜ゞ
べし。按ずるゞ足利氏時代ゞ弦鞄ゞ。
弓ゞてゞべし。文字の綾ゞ弦。又後世の
杜撰歟。後人ゞ可考。又曰。治郎天

赤おまん。當世様の長羽織。ぞろっぱちさ
祇園の揚屋などでてゐる氏時代の物とも
覚えんと見えし又扨撰ぶし。その外勝計をぐ
うぐと。

鷺坂伴内

伴内は忠臣義中才一の忠臣。旦夕師直に近
侍して一もむに遠つど。嫡に妙計を以九を丈
とまづけ。深く敵中に入て大星が測底を探る
ところのこうぐと師直完後の討義ふへ。粉骨
砕身して忠戦をなし不ともかんと其場に
て付死しるへ適忠臣。敬して不違。労して不
怨。能を代知るとりへべき也。但しおろかに慕
のるへ伴内とりへども木仆でへる男のあ
ることの支なり

○おかる

おちゆうぴいのおてん女とへけあるとさて

いへべきさうかをよれば。小夜衣の古歌を書。
師走人駿〻と云さうしゞ混雑の中百遠へ
まいりのでもはゞ今霄いよ〻ふせうとあり
をかるへ勅平ふ逢さき〻給のてアけふ
の一首や二首れ猟なさるゝ右ごの百のまいる
いあるまいとむりやるふさとめ四夜中をいつぞと
女の身ゆて打吻一人を供ふ連れ。はゝ一走ふ
きろて来さア〻ちんどやと勅平を撲目でえ

なぐろ吐息つく光景淫婦の面の猶さひ奴
ゞ今宵文箱を抱て来ぶゞへ。判友の身ふ別條
へある中ゞきふ。見非もまのきへ色のえく。ち上
勅平ゞ氏を見て。一すくと後掛へ引連行。
勅平ゞ武士氏捨させも皆見おるゞ罪
まろうゞや。什夜勅平と体内と意路の間ふ
ろうるをたゞひふあろうへ。其男ぶりと云るふ
勅平へ色生白く。我ろう細葱とらへ猛の痩

夫譬へば小性上りの寺侍の如き弱年男こ。
夫ゝ引うゝ。体内い色黒く肥脂付苦味あり
て天晴武士ゆきゝる男なれとも。おうゝ乾ぶ
性質。馬の衣を肩ゝる百姓の姫ゆゑ舎兄
や伯父の色の黒きゝ紙こ倦ゝれべ。色変動の
年をとるゝど。徐ゝく感心な浮虚者ゆて。
色の白い痩まと。年の色男と古風ゝ云ゝえ
と奴まれべ。男らゝき体内を嫌へて動年と

乗ゝりの也。扨紀里ゝ立ゝ。用金ゝ見の為
ゝそゝゝ二紀と相伴ゝ。夫ゆもゝらゝさと祇園
町へ身を售ゝ一代の大出来也。まゝより
一カゆて見平右衛ゝ物倍を哭。愁歎ゝ
なゝら。真河ゝ勿体ゝ父親さんへ。非業の
死でもお年の上ゝへ。扨く早くあきゝり
ゝるゝ。見でハ親の死ゝ紙。古ゝ瓶でも
折破ゝゝ伝ゝ哭えて。紀子の情合

玉簾し。まゐ引うく。勅幸どのへ三十ゐすゆ
ゐうらぞゐ死ぬるのゐ。嗟悲しうろ抓惜うろ。
あひ色てさうらうさであらうのふとゐあまり片昊員
の愁歎。就中あひさうろうであらうのふとゐ。
あうるうろうおど自惚と伺こ後尼とうろて
もりく處をゐうぞ。あるる人曰。おうるゞ身を沈
しを貞女とうゐべうろぞ。媚孔放蕩の性癖
きれば。好んで身を賣しものとうを。退て

監るゐ。三日居續の生良を助ゞ為体。家迚
の客とゐえぞ。思て考へべし。

○大星力弥

敵の仇を慰めんと獵金山の八重九重。
色く搦手を献ずる甚不審こ。主人判官
ゐ扇ゞ谷の上を攻。大行ゐて門戸を閉て
嚴しき閉門こ。ちうるゐ獵金山の搦手を折て
まるゐ。力弱ゐ拝でも有ともう

閑門と雀跡出入る。是利家と恐きざる不屈
のふるまひこ万一露顕せば人判支罪ホ罪
と宣ぬるるこ惟まざんべきぞと。浪人
して後京中ホ祇園町へ寄用ぜざるる
あり。月の入山科より一里半。息を切る脇
力弥ガ爲体。天窓を紫の帛紗包ホして
紅絹の脚半をとりてきる形容。其いぢらしき
る。火事ホ遇る串童ガ。供ホちぐきて歩る

ガ如し。げホ本義ガ洞あるるる。秋ホ劣
らぬ脇力弥ガ大だてけ。かる虚弱の性
質。さらや疲付の時ホ編まべ。吾多の打ホ
立合ふとも勝負危ふるべ。且又小波と
緑細云約束しるうん。力弥ガ爲ホ本義
ハ男ぞう。強るを強ひ歩ホよるるすいうぞや。
実初より力弥在宿のるすれべ。かれどホ
むづうしき元合ホうざるうちホ。かけ出て

えさうざるや。一方ハ無。一方ハ男。いづれを不經我過ぐありてもとるぬ大切のあん。そのあとを空なぐら。奥ハさうらんで居るるを ふ始すり。本義ぐ仏底うちあらーさうたあらべて小波と妻拵りしる其報えぐさし。ひたぐひ妻ーく味せべ粧べられども。美崖若のるなれべ強て強ぐ。はるにを助ぐ九りー雪の徑。力弱解拔て甚妙すり。

父由良之助ぐ日強者の比諭。拵りて拙ー空中塔を散をとらべしー

○原郷右衛門

人ハ媚諂ハ侍でるハ。武士でるハるぐー古風なるをとらて。當世をとらーね吝嗇者師亟の音物も。國産の腐物。食られも可ね乾魚なぐ紙賂るーゆる。師直ぐ立腹さるも尤こ。九ちまぐ曰。ひ交強勅の元をらべ。ひちまつ

どのこるさの斉藤。ちうさうう部ちうる。金
銀と以。面をそりめうるまべ。かゆうるへ
出来申さうねと云云。見たきまぶ金言ふう。
ゆたうう。人ふ編ふへ武士でるいとりふにの
下ううう。見へ用くうのうれべれ門もゆうき。
用門もれ免さうう吉事のれ親向などう。
ねうう至うう至の河。又りやたきまふゆり
うりうう也しぶ。たきまぶりふ遠ゆを々

右出つう舌も乾うね向ふ判皮へ切抜しうう。
按ずるふ理ふ暗き男とええうう。其後浪
人して勅平が家ふ居ふ。勅平切後の場ふ
至うて。始終弥又帛ぶ尻ふ付て口代笑。適
口河出をと笑くふ。うくべく代金へ。縞の財布
の紫摩黄金などく洒落て。ふ員の痛も
かまつぶをる森をはくう。別て項る門に。弥
又帛も同ぶく役者ふて。首ふをうる代金へ

聟と舅の七七日四十九日や五十両。合て百あ百箇日の。追善供養帰りれよ。なぞ家内の混雑ともとひやうぶと。かけ合のお会釈酒落しゝ。服ゑ下情ふ通ぜぬる也。

○石堂右馬之丞

叶男毒ふも茶ふもちゝぬとえゝれべ論ゑ

○山名次郎左衛門

心正直ふて勇氣逞きゆゑ。猴の内と洗ひ沸へふぶちまけて去まひ。歯ふ衣着せと申ことふて去まへ。次でさろたりとるといふ氣性なり。切腹の坊ふて判官ゞ失礼を外ゆる。胴一く理の当然なり。回廻付の坊ふ至りて体内と倶ふ潔く討死去まへ通勇者なり

○斧定九郎

評するに足らぬ奴。去りとて一云に膨れ
金子四五十両の嵩。絹の紙布に入て
あるまでえとうくる眼力。流石に血筋
あらそはるどもされど前径とまで落魄
〳〵え下果くる奴九寸ぐが面様しるが。

○千崎弥五郎

狡猾痴れに似たれども見へ力でえぐる
痴と。与一云に成ぐ死骸を改て動平が寃
の難を救へ。あつぱを出来う。其外へ仕
と伯仲の間まれバらくに論ぜど。

○猪

世に有ふ〳〵猪と云へ形小く異こ。首小く
あ足二本へぶらさがりとぶらさがりるのこ
めて。後足二本あて蒐出せり。け後足人の
足に近し。其歩行に成さがてあのづう
テンテレツクてれつくの音あり。猪しりへて

猪の種類なるべき歟。獣屋ハ何へどもちゝぶと
本草家も未詳とりゝ。何ゝも甚ハ形甚ぶ
とゝ牲。よして考べし。

○百性与一兵衛

子の為ハ夜道ともらとつぶ。労して功なき
非業の死。ゑぐりるしぶ弘めて。勿体なへ
ぶゝとさんへ。非業の死でもお年のうへなぶ
娘かゝるふりゝもてへ。一向うゝ手ゝねるゝ。吁

あゝもむべし〳〵南無阿弥陀佛。南無妙法蓮
華經。

○与一兵衛妻

勤平を恨ての泪一〳〵理ハ逼て尤なり。
ねもくゝ夫婦なぶゝ捨へも捨ひ〳〵不幸の
くぶゝる。就中ハ老母へ夫与一兵衛。聟勤
平ハ死別ま。恋人の平右衛門ハ不実ぶぶ
蔓あゝゆゑ肉へとゝへ嘗つぶぶ。娘あゝる

ふへ生別も。身一つといふなりけん。後かる尼とすり〳〵ゆゑ。俱ふ菴室ふ修ひらん

〳〵ぞ。

○一文字屋才兵衛

○めんぢう弥八

○種箇島の六

○狸の角兵衛

右ふの〳〵論なり

○寺岡平右衛門

雁ぐ飛べば秦亀もぐんぞと申す。鎧金人士誠

三ケ月ぐる非人とすりて仇敵〳〵人ども。敵ハ

用心義〳〵なるべ函嘉るる叶わぬ。退後と

ろひ〳〵ぐ岡の私をろひ出し。さどくと陣し

〳〵足軽お勢の了爲すり。ロ十仮人の義士。

粉骨碎身〳〵てさへはと仇ざるふ。平右衛門

一人。非人となるゑ〳〵ねのるあて。まふへべき

敵ふあるごと。其外倫ざるふ只ごと小者の悲しさ。蟹ハ甲ふ似て穴を掘る。卓量小〳〵。

○矢間重太郎

○竹森喜多八

人足ちげき揚屋ふ入りて。張合人坊立時候ハいろ〳〵でござるの。イヤ一味連判の者共へえせ〳〵めなど〳〵。あらう悪〳〵ごと高ぐと罵る云ふ別。殺第一ふ〳〵くのまねるふ。ぼんやりのごとく殿くあやまりへ申さとんぞの裏うへを表裏の待。見為ハくぞうきの一味同心するべし。

○お石

お石ハ実ふ武士の女房なり。洞のえ〳〵ぐきつ〳〵て和〳〵うふ屋ふも茄つごと。剛も吐ざる勢あり。戸云敷為ると同日の倫ふあるごと

○天川屋義平

義平へ任侠なり。和ふ論なり。志うし。彼のゆえもあき。家老職の空言をゆより縮物とあらべ。先一旦へ受べきなり。礼物受うとて金ぐけのおせらへやさねとの一言甚界し。うけぬのこなうぞ進物を足あて饒舌をる。けよもあき非礼なり。町人の町人る所以なり。

○大田了作

吾かゝら移べなゝねもとりの娘を義平へ嫁よつゝし。二三年も連そのとう人。彼の沢もらゝぞ和了作方へうし。了作も聟のるなり。姫の変ちより。投なり一旦へあづうりゝ拘の。扱る知ら移べ仲ず。後日ふ聟義平うゝ移。る細とたづねもゝも云ぞ。ゝうゝべりうすで移りかゝも遂義なり。今までの変りふ引ゝ生べは。それも

なるべし。しかるを、をさをさ、ねるとの
お対へ。自然の道理にて。子供にとても
理なし。されくるべき筆初る時決を
正し。際立るものゝ初るぬるゝ。けこゝの外
に生じ。流石子供者へ医業もせるる程
の人物ゆゑ。学問も有。勿論あるゝ優る
場所もありて。先づ角まゝ
誠に温厚の君子とゝよべし。世間けこゝを

そゝる哀謂なり

○かその

○よゝ松

○伊吾

論

紫紙人をいつくしみ、きとを
直人にて、口多くあるを
多ト雨云

忠臣藏偏癡氣論 大尾

おゝろのよゝの新茶

江戸の香

ここへ代江十八文

定一きろこをうゝしてゆ新のはやを
知ゝ白粉はのりゝ紅はゝゆゝ
よくのゝてそげを其いゝ世ゝ風ゝ
あるゝもそげざるゆゝけ合ゝ
はきびそこけそゝをあせも
はゝゝのゝ紅ゝの一切ゝよゝ
〈強問ゝ新あゝ

近来ゝゝゝしき類茶ゝゝ
足及ゝる名ゝは及はゝゝ
新極て新ゝ

式亭三馬製

三馬店ひろう

仙方延壽丹

たちまち効りやく

のみぜ引さげたんせきゆへ即功あり
かるきめ二三ゑふもちゐてたちまちげんとうべし

関東賣弘所
江戸本町二丁目
京都 田中宗悦製
武亭三馬店

○法虚百損を補ひ良薬されべよりもくしきゆへ和漢あるいは
其ちゑ一ゆりえていの癌ハ二朱より用て功あるべし一生ふるゑ
壮健なるべし

△元禄年中元祖宗悦江戸ゆ関東へくだりてより九百二十余年お績を累ね大坂
ゆて製する薬ハ江戸よりおいて賣ひらるゝ我延壽丹とよりそ世人よろく
ちるゆゑ我ハ功能とゝゆいへど○百文○二ゑ○三ゑ○匹ゑ○銀二朱○金百疋
一剣 銀弐拾文 佛國五次郎あきこゝろ

文化九年壬申春正月發市

書林 錦繪草紙地本類 問屋 雙鶴堂 鶴屋金助開鐫

雙鶴堂藏版書目 江戸田所町 鶴屋金助梓

五山堂詩話 全一卷 池無絃先生著
奇ヒ妙ヒナル詩ノ話ヲアツメタレバ詩作ノカトナルベキ面白キ書ナリ
全二編 三編 四編 既出

詩聖堂詩話 全一卷 天民先生著
珍ラシキ詩ノハナシ並ニ自作ノ絶句百首ヲ頼メテ初心詩作ノ便トス
全 百絶 全一卷 合刻

醉別帖 廣澤先生書 全一卷

伊勢物語 ひらがな大字 全二冊

尺牘帖 東江先生書 全一卷

早見道中記 懐中本 全一冊

小學句讀 道春點大字 全四冊 世ニアル小學ノコトカリ謬誤ヲ大字ノ善本ナリ江戸版ト御尋給ハバ

草書法要 全二本

漢魏六朝ヨリ唐宋元明ニテ諸名家ノ草体ヲ諸法帖ヨリ摹勒シテ書引一類聚ス
ベ某ノ字ヲ捜ントヲ思フ時毎卷首ノ撿字ヨ見レバ某ノ卷某ノ葉ナルヿ早ク知シ其ハ二至リ

一名 草字彙 別号 早引草字彙

イロ〳〵ノ字体備ハ其好ム所ニ從ヒ之ヲ草本ヲ求リ速ナルヿ此書ニ如ルナシ因テ早引草字彙

東都 劉子書

增補暦略註

全一冊

梅之與四兵衛物語 梅花氷烈衣前編 三冊 山東京傳編・歌川豊国画

松浦佐用姫石魂録前編 三冊 曲亭馬琴編・歌川豊廣画

字彙 集成 增補節用早指南大全 横切大冊全壹冊

滑稽江之嶋土産 十返舍一九編 初編二編三編合五冊 阿波之鳴門 全五冊 柳亭種彦編 葛飾北齋画

閑老巷説 蒐道園 来揚庵光編 全五冊 獨揺新語 若葉榮 全五冊 熟睡亭編 榮松齋画

流轉數回 阿古義物語前編五冊 式亭三馬編・歌川豊国画 歌川国貞画

繪入讀本 忠臣藏偏凝氣論 全一冊 式亭三馬作 歌川國直画

繪入讀本 名總角兩個助六 全六冊 同作 歌川國貞画

髭の意久髭の無休

関東小津國勝山 丹前風呂昔繪容 全六冊 同作 歌川國直画

赤本再興○桃太郎 全三冊 同補 歌川國丸画

赤本再興○花咲爺 全三冊 同補 歌川國丸画

繁苍恩澤 江戸水福譚 全三冊 同作 歌川國直画

右の三作は用板實出かの出来ものなり 書林 江戸田所町 鶴屋金助版